

中学生の動機づけ調整方略への学級活動を通しての支援 —受験期の学習に注目して—

○橋本 巖 (愛媛大学)
城戸 茂# (愛媛大学)

松田美穂# (松山市立西中学校)

キーワード：動機づけ調整方略，自己調整学習，中学生

問題と目的

中学校での長期の実習・観察経験から、生徒らの中には、「やる気の出ない時自分はどう対処しているか」との問いに答え得ない者が存在し、自己の学習態度や方法について意識する機会が少ないことが示唆された。「学びに向かう力」の育成が求められる中、本研究では、中学生(主として3年生)の自律的な学びを支援する一助として、自己調整学習における「動機づけ(自己)調整方略」に着目し、生徒が用いている方略の質問紙調査をふまえた学級活動の授業と自己選択実践を通して、その認識と活用の促進を図ることを目的とした。

方 法

質問紙の作成 予備調査(前年度1, 2月)において、A市X中学3年生91名を対象に自由記述調査を実施。普段、家庭や学校でやる気が出ない場合どのようにやる気を出すか、やる気の出ない後輩への助言、等を問い、自由記述を収集。併せて、伊藤・神藤(2003)、伊藤(2009)、梅本・田中(2012)等による動機づけ方略項目を参照し、26項目の中学生用動機づけ調整方略尺度を作成した(4件法)。

本調査
対象者と手続き 第1回7月調査：X中学校新年度3年生7学級204名。第2回12月調査：7学級206名。2回の調査の間(2学期)に学級活動を3学級で実施した。質問紙調査は、学級担任により無記名式で倫理的配慮説明の後実施された。質問紙冊子：(1)やる気の出ない経験の頻度(2)動機づけ調整方略、(3)学習方略、(4)学習動機づけ尺度、を冊子に掲載。

学級活動の内容 7学級のうち3学級を学活実施群、4学級を学活非実施群に設定。実施群では2回の学級活動を実施した。

学活1回目では、「やる気を高める・出す方法」について情報提示しない段階で議論した後、質問紙調査で得た因子名をわかりやすく付け直して「動機づけ調整方略」を紹介し解説した。自分たちが実際にこれらの方略を使用していることを意識喚起し、話し合いを促した。その後、「やる気コントロール表」を用いて実際に期末試験に向け、試してみたい方略を挙げさせ、期末試験までの間の使用記録を求め、方略使用を促した。学活2回目では実際に使用した方略について振り返るとともに、方略使用の過程でどのような変化があった

のか、実際に学習への取組に影響を与えたのかについてワークシートに記述を求めた。

結果と考察

動機づけ調整方略尺度および他の尺度の因子分析 主因子法・プロマックス回転による探索的因子分析の結果、動機づけ調整方略尺度では、「目的強調方略」($\alpha=.89$)、「効力感優先方略」($\alpha=.83$)、「注意コントロール方略」($\alpha=.67$)、「報酬設定方略」($\alpha=.70$)を抽出する4因子解を採用した。(なお、学習方略は、認知的方略、外的リソース方略、同化的方略(意味付け)の3因子を、また、学習動機づけは先行研究同様に、内発的、同一化的、取り入れ的、外的、の4因子)。

動機づけ調整方略の主要な傾向と特徴 (1)7月調査と12月調査の因子分析結果はほぼ同一の因子解が得られた。(2)また2時点間の同一因子の相関係数は有意な正相関を示すものがあり、個人内での方略選好・使用傾向のある程度の一貫性が示唆された。(3)さらに、学級活動を経て、7月より12月の方が方略使用度が高くなるとの有意差はほとんど確認されなかった。(4)4つの方略のうち、目的強調方略および注意コントロール方略は、学習動機づけ尺度の「内発的」あるいは「同一化的」という自律的動機づけとの有意な正相関を顕著に示した。一方、報酬設定方略は、外的(外発的)動機づけ傾向と言う他律的動機づけと正相関を示した。効力感優先方略以外の3方略は各教科の学習進展感評定と正相関を示した。

学級活動による動機づけ調整方略選択使用の検討(概要) (1)学級活動1回目：多くの生徒が今まで使ったことのない方略を試験勉強に使用したいとの感想を示した。(2)学級活動2回目：期末試験勉強での使用と2つの学活における「これから試したい(使っていきたい)やる気を出す方法」に関する記述の変化から、「方略を自身の生活の中で具体化した」「方略を状況に応じて使い分けた」「2回目の授業の影響を受けた」という3つの変化に分類した。生徒が実際に使用する中で試行錯誤を行い、自身の生活やその場の状況に合うよう方略を変化させていったことが分かる。この一連のプロセスがまさに自己調整につながると考えられる。

付 記

本発表は愛媛大学教職大学院・実践研究報告書(松田美穂)の再分析に基づいている。